

中部の

エネルギーを 築いた



福沢諭吉の薫陶を受けて政財界で活躍し、
矢作水力社長を勤めた **井上角五郎**

井上角五郎(1860~1938)は明治23年から34年間国会議員を勤めた政治家であり、北海道炭鉱鉄道などを経営した経営者でもあった。また矢作水力の創設から足かけ10年社長を勤めた電力人でもあった。中部電力初代社長の井上五郎のご尊父でもあった。



井上角五郎

出典：『北海道炭鉱鉄道五十年史』

福沢諭吉に師事

井上角五郎は万延元年10月、現在の広島県福山市に、庄屋井上忠五郎の5男として生まれた。儒者山室汲古の家塾に学び、その推挙で明治元年、藩士にしか許されなかった藩校誠之館に入学した。成績抜群で、藩主阿部正桓公に御前講義をしたこともあった。明治8年広島県立尋常師範学校に進み、卒業後小学校の教員となったが、向学の志強く、明治12年に上京、紹介状もないまま福沢諭吉の門を叩いた。福沢は井上の学識を見抜き、福沢家の家庭教師として迎え、慶応

義塾への入塾

を許した。井

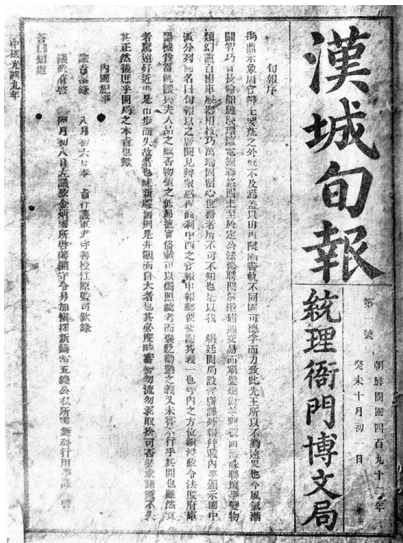
上は福沢家に住み、子女の家庭教師のほか福沢の代筆などを勤めた。15年7月に慶応義塾卒業後、福沢の勧めで朝鮮に渡った。当時福沢は朝鮮近代化について助言を求められており、新聞発刊に協力する事となったのである。井上は朝鮮政府顧問として官報

「漢城旬報」発刊に協力したが、17年5月甲申事変(開化派クーデター)に巻き込まれて一旦帰国、再渡航して漢字・諺文混合文体を初めて公式に使用する「漢城周報」を発行、19年12月に帰国した。その後、福沢の勧めで米国移住事業に関与し、21年には藩閥政府を批判した朝鮮時代の文章で官吏侮辱罪に問われ、1ヶ年余投獄の経験をした。出獄後は、福沢諭吉を通じて面識のあった後藤象二郎伯の



福沢諭吉

出典：『未来をひらく福沢諭吉展』(図録)



『漢城旬報』

出典：『北海道炭鉱鉄道五十年史』

許に身を寄せ、大同団結運動に参画した。明治23年の第1回衆議院選挙で当選（広島県選

出)し、以来大正13年1月まで国会議員として活躍した。

北海道炭鉱鉄道専務取締役 部下に福沢桃介

国会活動の傍ら、北海道で炭鉱および鉄道事業を経営する北海道炭鉱鉄道にも関わった。福沢諭吉は同社創設に際し助言を求められた事があり、その関係で米国留

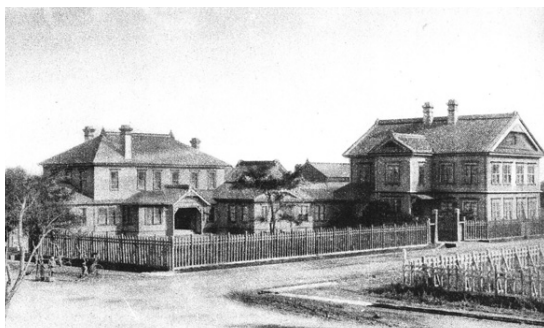


福沢桃介

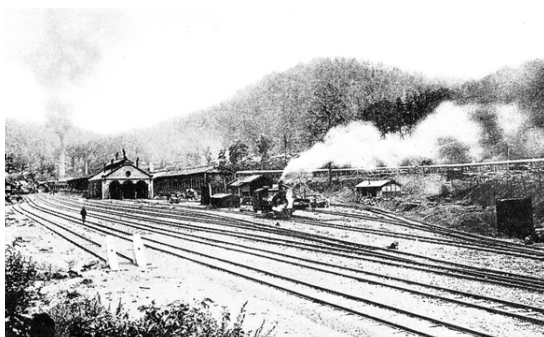
出典：『福沢桃介翁伝』

学から戻った福沢桃介も同社に入社していた。北海道炭鉱鉄道では、室蘭線建設をめぐる社内素乱で社長が解任されることがあった。混乱の收拾に福沢に協力要請があり、実質的な経営責任者として井上が招聘されたのである。明治26年5月に理事、32年2月に専務取締役に就任した井上は、社内整理を断行し、経営立て直しに成果を挙げた。一旦退社していた福沢桃介を秘書役として任用し、以来福沢桃介は13年間井上に仕えた。39年1月、日本の民間企業で初となる英貨債発行(100万ポンド)は井上の大きな功績とされるが、交渉に当たり英語に堪能な福沢桃介が補佐し、成功に導いた。同年10月、経営の柱であった鉄道事業が国有化され、北海道炭鉱汽船へと改称した。譲渡資金を基に、40年10月、井上は日英共同プロジェクトとして日本製鋼所を創設したが、日露戦後の不況に際会し、資金を固定させたことが原因して業績は悪化し、43年4月、責任をとって辞任した。

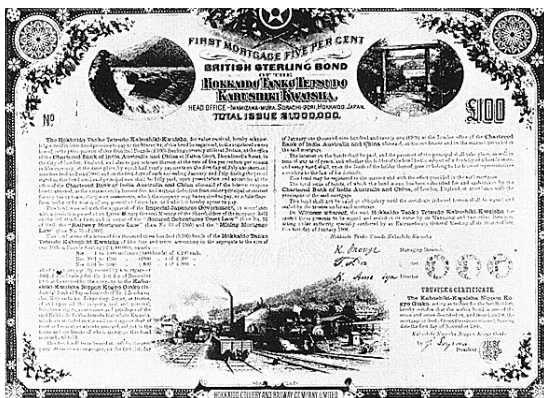
井上は、北海道炭鉱鉄道のほか、北海道人造肥料(社長)、千代田生命(取締役)、日本瓦



創業当時の北海道炭鉱鉄道本社
出典：『北海道炭鉱鉄道五十年史』



開坑当時の夕張炭鉱
出典：『北海道炭鉱鉄道五十年史』



英貨社債券(北海道炭鉱鉄道)
出典：『北海道炭鉱鉄道五十年史』

斯(監査役)、日本ペイント(同)、京釜鉄道(同)など多くの事業に関わった。

矢作水力社長

大正元年、福沢桃介は水力勃興を予見して大正企業組合を組織し、井上に参加を求めた。同組合は各地河川の水力調査を行い、大正8年3月、矢作川での水利使用許可を得て矢作水力を創設、福沢の推挙により井上が社長に就任した。井上は、第1次大戦後の厳しい経営環境のなか、岩村電気軌道の合併、矢作索道の設立を進め、矢作川上流部に下村発電所、押山発電所、真弓発電所、上村発電所など6発電所計2万4330kWを建



上村発電所外観

設し、同社の基礎を築いた。大正14年11月に上村発電所が完成したとき、求められてその取水口に易経の言葉「信亨」と題字を掲げた。その意味を問われたとき「なべて世はまこころのみぞとほりける けはしきものは水ばかりかは」と井上は歌で答えている。昭和2年10月には南信電力を合併し、天竜川水系へと事業の拡大をはかった。井上は円熟した性格と老練な統率とにより足かけ10年社長を勤め、同3年4月社長を辞した。後任社長には、福沢桃介の長子駒吉を推した。生涯福沢諭吉への恩義と感謝の念を忘れることのなかった井上は、福沢駒吉に事業を託すに当たり、「私は素と福沢諭吉先生に育てられて人と成り今日に至ったのであるから…福沢駒吉君に自分の職を譲るのは恰も親が其子に家督を譲ると同じ」と語っている。退任後、井上は名誉顧問として遇せられた。

井上は漢学の素養が深く、宗教心に厚く、歌をたしなみ、多くの著書を残して昭和13年9月、78歳で逝去した。6男5女の子供をなしたが、5男井上五郎は東京帝国大学電気工学科を卒業後、東邦電力第1期生として



上村発電所 取水口「信亨」(井上角五郎)



矢作水力記功碑

入社し、後に中部配電副社長、中部電力初代社長、動力炉核燃料開発事業団理事長などを勤めた。
(浅野 伸一)